

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年八月一日発行(毎月一回一日発行)
第十六巻第四号(通巻第一八四号)

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第184号

8. 2009

天牛

品川 鈴子

天^{かみきり}牛は髭まで伊^だ達^て斑^ふ岩を攀づ

天牛の歯ぎしり巖ずり落ちて

墜ち墜つも天牛遂に巖攀ぢ

ごまだら天牛生る遠忌の塔婆から



首擡^{もた}げ揚々と来る茄子の馬
足元に萎えし紅薔薇アンネ像
炎昼も昏き屋根裏アンネの記
汗の筋剥げ白塗りの吸血鬼
三階の回廊^{デッキ}涼しき風車小屋
夕立に動きだしたる風車小屋



玉

鈴

吟

兵庫 木原 今女

母の日に黄泉への友を見送りぬ
身罷りの傍に白きカーネーション
松の芯くぐりて葬の香手向け
卯の花の屋敷にマンション建ち上る
補助輪をはづせとせがむ子供の日

兵庫 木村 美猫

やはらかきペン先を選ぶ多佳子の忌
黙々と金魚を生計にますらをよ
話とんで戻るをんなの暑氣払ひ
夏化粧親には今も自慢の娘
丹波路の大樹を見上ぐ夏の朝

愛媛 久保田由布

嘆きゐて茨の花に囲まるる
夏座敷正客甘きものを断つ
重文の山門の地に蟻地獄
集会所の燕他所者知り分けて
燕の子つばめ返しをして見せる

兵庫 藏本博美

初夏の海心やさしき人を呼ぶ
病む床へ君が持ち込む新茶かな
クレーン車の赤が引き上ぐ夏の海
点滴にわが身繋がれ初夏病棟
兄弟に揚羽舞ひ降り泣き笑ひ

兵庫 國永靖子

吊屋根を染めて切戸の夏没日
焼岳を離れぬ紫煙夏はじめ
駒鳥に山目覚めゆく田代池
絵硝子の魚動くかに青葉風
疏水辺り途絶え蹴上へ花うつき

兵庫 栗田武三

時合待つ煙草の明かり穴子釣
波止の灯の届かぬ闇に穴子釣る
抜きあげてまづ踏んづける大穴子
一酌に海の香りの焼穴子
播州の焼穴子なり香るなり

大阪 小阪律子

花供養「内八文字」の足捌き
煌めきて生簀離るる桜鯛
花の路地人それぞれ曲り角
自分似の羅漢探して花の蔭
翼廊をせかせか歩く僧に飛花

東京 後藤とみ子

メーデーの胸にすずらん飾るらし
木苺のマカロン買ひ食ひ異国にて
夏の風邪気にしながらの旅となる
二重窓開けて五月の風入れる
ケータイで誰に知らせん夕虹を

大阪 小林 玲子

雪残る嶺の名知れぬままに過ぐ
踏みそうな厚岸草の芽楊枝ほど
春昼に口溶け早き和三盆
坑道に入ればさらなる若葉冷え
差し潮に石蓴たちまち色深む

香川 近藤 倫子

エナメルの靴に貼り付く花の屑
フランスの小母さんもみて花の園
人の世に未練残してしやぼん玉
辣蕪漬けいつも誰かが探し物
渋滞を見上ぐ鳴門の春の潮

兵庫 佐方 敏明

こどもの日子に諭される年になり
新緑へ飛びたむとす石の鷲
春疾風軍歌響かせ街宣車
風光る朝のジヨギング若夫婦
みどりの日花鉢五つ妻は買ふ

東京 佐山 昭子

咲きみちて子規・虚子展の桜かな
老夫婦置いたまま去り桜草
受難週の棕櫚の十字架乾きけり
風湧くや神学校跡夏木立
老鷲のこゑ佳境にと入りにけり

兵庫 塩出 眞一

寺うちら屋根に別子べっしの銅を張り
伊予弁が弾む厚岸草あつけしぞうの芽に
除幕句碑は伊予の青石緑さす
白無垢になんぢやもんぢやの咲き満つる
腕太き三盆職人阿波うらら

香川 島内 美佳

雨降りてフロントガラスより花見
ユニフォーム白さ眩しき新入生
勘三郎の足触れさうな春の昼
牡丹寺妻を立たせて写真撮る
変はりなく注ぐ愛情花水木

薬草歳時記

(一八三) アイ、タデアイ(藍、蓼藍)

三 輪 慶 子

蜘蛛の糸垂る藍壺にとどくまで

品川 鈴子

この句は、滋賀県野洲の「紺丸」での作と自解にあります。この藍壺は藍染の液をたたえた壺。藍といえは先ず藍染、古く飛鳥、奈良時代から染色に利用されてきました。

蓼藍の葉にはインドキシル配糖体インディカンが含まれています。これを加水分解してインドキシルに、インドキシルは酸化されてインディゴになります。化学式では簡単ですが藍農家から紺屋まで天然藍の作業はたいへんです。

農家は開花前の藍の葉を刈り取って、刻み乾燥し葉藍として出荷する。藍師は葉藍に水を打って発酵させ染とし、又は葉を白について藍玉として出荷します。水に溶けないインディゴを染色のために水溶液にする、この作業を「藍を建てるといいます。古来の発酵建は長年の習練と勘が必要な伝統的作業。この発酵を繰り返すことによって染色後も発酵菌が永く繊維の中で生き続け年とともに色がさえていきます。「紺丸」は栽培からの一貫作業のようです。

藍はタデ科の一年草で、イヌタデ(アカノマンマ)とよく似ています。私もこの春藍の種を蒔いてみました。ゴマより

小さい種で、やっと出た双葉はゴマ粒二つ並べたような小ささ。本葉が出てくると逞しくなつて今は畑の隅で茂っています。残念ながら花はまだ。「藍植う」は晩春「藍刈る」は晩夏、「藍の花」は仲秋という訳です。

蓼藍の葉と果実に薬効があります。干した葉を加工して青黛として漢方処方に使われます。消炎、解毒、解熱、止血作用があります。虫さされには生の葉汁をあてます。畑から藍の葉とイヌタデの葉を採ってきてすりつぶしてみました。両方ともすぐ緑色の液になりますが、そのまま放置しますと、イヌタデは変化なし、蓼藍の葉は藍色がにじんできて青緑ともいう深い色に変わります。芽タデやタデ酢として料理に使われるホンタデも虫さされに同じ作用がありますが、藍色にならず辛味があります。蓼藍には辛味がありません。ホンタデも暑気あたり、食あたりに効きますから残さず頂きましょう。天然藍で染めたものは虫を寄せ付けないと言われ、野良着にも武士の装束にも使われてきました。発酵を繰り返していく天然藍の各行程のどこかに未知の薬効が潜んでいるかもしれない。そんな研究者も居り、ますます天然藍の魅力を感じます。今年の夏休みは藍の生葉染めに挑戦です。

参考文献 『原色牧野和漢薬草大図鑑』北隆館
著者略歴 神戸薬科大学卒

アイ(タデアイ) [タデ属] (たで科)
Polygonum tinctorium Lour.
 (藍、蓼藍)

オオケタデ (ハブテコブラ) [タデ属] (たで科)
Polygonum orientate L. (大毛蓼)



藍咲けり四国三郎見下ろして	藍染の工房藍の花活けて	藍咲くや橋流れしは二た昔	見染め咲く阿波藍花に山の翳	秘めしその色はかられず藍の花	藍の花葉れば紅の失せにけり	古木偶のさんばら髪や藍の花	いくつかの藍の言葉を女より	藍刈やここも故郷に似たるかな	島原の外も染むるや藍島
*塩出	*片野	友岡	河野多希女	桑田	坊城	吉田	高野	正岡	嵐
眞一	光子	子郷	青虎	中子	汀史	素十	子規	雪	

(*くろつけ)

鈴の奏

品川鈴子選

深酒の癖は直らず古浴衣 兵庫 上田 幸夫

銭湯の名も知らぬ友ラムネ瓶

文字ばかり吐き出すコピー油照

頼らることなくなりて大昼寝

親ごころ解す^{よわい}齡にカーネーション 香川

引越の腕ばかり上げ風薫る

タイミングひとつずれたり鳥の恋

ジャム煮詰め黄金週間には無縁

葉桜の木洩れ陽けんぱ下校の児

葉ざくらに來て一本の遅桜 兵庫 岩木 眞澄

灯をとすまでのひととき藤の椅子

和と洋の目高分けられ理科室に

生徒ほど長閑ならざり新教師 兵庫 吉田 耕人

呆けてゐることくに仰ぎ八重桜

花筵 飲^{おんじき}食余すこと勿れ

異議なしにあらざ蛙の目借時

若葉晴村社に能を舞ふ米寿 兵庫 改正 節夫

水難の川と知らずや残る鴨

鶯の芽の放つ光を塀の角

鶯や憩へ憩へと杣の道

新緑を光背として如水句碑 兵庫 平田恵美子

下津井の潮目三筋に夏近し

塩飽諸島を臨む山々桐の花

大き掌に生る和三盆敢て古茶 兵庫 太田 實

風を撫で來し方なぞるおわら盆

炎帝ものぞき込むなり甲子園

住僧の足首清し月見草

点し継ぐ悔悟の火色原爆忌 東京 堤 節子

博物館長蛇の列に貸し日傘

仏像展見終へ一氣にアイスコーピー

鬢付けの香振り撒く五月場所

新弟子は部屋名褪せたる古浴衣

薔薇園のゆかりを聞くも薔薇の中 東京 遠藤とも子

天津乙女ルイ十四世みな薔薇の名に

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 木原 今女 〃

*選句は全て 品川鈴子

深酒の癖は直らず古浴衣

上田 幸夫

度をすごして酒を飲む癖は若い頃から知られ、その為失敗なども数え切れないほどある。穏やかな人柄だが、この癖は少しも改まらず、洗いざらしの浴衣で、寛いで飲み始めると、誰も相手できない酒量。自分も判っているのに困った癖だ。でも深酒も古浴衣も当人の肌身に副う快さなのろう。

ジャム煮詰め黄金週間には無縁

横内かよこ

自家製のジャムは防腐剤など使わず、手間暇掛けてゆっくり煮詰める。世に聞せず、ひとり台所に籠もって、おいしい保存食をこつそり用意するのも、主婦の楽しみの一つで、優雅な時間と思う。

ゴールデンウィークなので、人出はどこも最高だろう。疲れ果てた家族連れなどをニュースで見るにつけ、乙な炊事に熱中する至福。

和と洋の目高分けられ理科室に 岩木 眞澄

日本の淡水魚では一番小さいのが目高。川の淀みや沼湖に群れて親しまれるが、涼を呼ぶため水槽に飼われる。三センチほどの背中は淡い褐色で緋や白の変種もある。北アメリカから移殖の「タツプミノ」は似ているが、胎生の別種でやや大きくて五センチほど。理科室では和洋の種類を見分け、違いが判るようにして飼う。一般に動物も洋種の方が大きく勢いも強く和種が絶滅し易い傾向。

生徒ほど長閑ならざり新教師 吉田 耕人

入学や進級した生徒は、学校にも友達にも慣れて穏やかに学校生活を送っているが新任の教師はそうはいかない。今までの自由な学生生活から、社会の荒波にこぎだしたのだから、大事な生徒を守ってゆく立場へと大きく変換したのだから。

若葉晴村社に能を舞ふ米寿

改正 節夫

鬢付けの香振り撒く五月場所

堤 節子

周りの木々の萌え出る若葉の中に社は埋もれているよう。その能舞台で雅に摺り足で舞っているのは老いてますます壮なる方、笛も小鼓、大鼓、太鼓の音は若葉の中にすい込まれていくよう。

新緑を光背として如水句碑

平田恵美子

遠き日の師団司令部花ぐもり

遠藤とも子

今年四月二十六日、愛媛県新居浜市滝の宮町に故三浦如水氏の句碑建立の除幕式が執り行われました。その句碑の後ろには、新緑の光りがまるで仏様の後光のよう。新緑を光背とするスケールの大きさに脱帽。

炎帝ものぞき込むなり甲子園

太田 實

夏風邪のひろがる港都赤き月

中山勢都子

夏の高校野球の試合だとプラスバンドが応援歌を轟かし応援団は校旗を振って声援を送る。夏の神様も何ごとならむと雲をかき分け、高みの見物と洒落こんでいる。のぞき込むで揚句が生き生きしてきました。

両国の国技館で、東西の花道の奥で気合を入れてから出てくる力士の大きな体だけでも存在があるのに、大銀杏に結った頭から鬢付油の香がただよってくると、東京都に住まいの堤さんなら差詰め今から取り組む土俵の一番に応援したくなりますね。

太平洋戦争の終戦から六十四年を経て、陸軍司令部の在った場所は桜にかこまれて折りからのうす曇りに平和な日常が続いている。

戦に明け暮れた遠き日の記憶を花ぐもりと下五に置いた現在の有り様との対比が見事。

今年の五月にはメキシコを発祥地として新型インフルエンザが、日本国内にも潜入。感染発病したのが神戸市内の高校生だった。